



## 女性医師の窓

### 7年目のつぶやき

金沢大学附属病院皮膚科 吉村 紫

金沢大学附属病院で2年間研修し、その後同院の皮膚科に入局し5年が経過した。あっという間の7年で、研修医時代の7年目の医師とは雲の上のような存在に見えた。自分自身はその年代になるとまだまだ発展途上であることを実感する。私は入局してから、これまでに大学病院勤務を含め4つの病院で勉強させていただいた。その中で感じたことをつぶやく。

経験年数が増すにつれ変な遠慮やプライドがでてくる。日常の診療では疑問に思うことがたくさんある。しかし隣の診療室で忙しそうにしている上司を見ると聞いていいのかと遠慮してしまうことがあった。どうしても知りたいことがあり合間をぬって質問してみると、その後に戻ってきた答えが自分の予測していた以上の内容だった。この皮疹の色調は10回ぐらい経験していれば次は見た瞬間にわかる、この傷にはこんな処置を追加すればよい、この検査を追加しておくといよい、この治療で一旦改善するがきっと今後も再燃を繰り返すだろう等色々な知見を与えていただいた。そんなちょっとしたアドバイスから考え方が変わってきて診療が面白くなってきた。現在の私は診断する事1点に軸をおきがちであるが、先輩医師には診断・治療・予後と疾患を長い軸でみているため余裕がある。それは教科書的な知識と共に多くの経験から得られた結果なのだろう。私自身も後輩を指導する機会が増えてきた。指導は思っていた以上に難しいエネルギーが必要である。自分にはまだ相手を納得させられるだけの知識がないことに気づかされ、こちらが勉強させてもらうことが多々ある。経験を積んで、それを若手に伝え続けている先輩方に感服させられる。

次に、大学病院と市中病院の勤務で感じたことである。大学病院は雑用が多い、カンファレンスが長いなど敬遠されがちである。論文や学会、カンファレンス準備等で考え・まとめる仕事が申し掛かってつらい事もある。だが大学の場合は、マンパワーがある。色々な意見が飛び交い難しい疾患も解決できることもあるし、重症疾患の処置が早く進められるなど利点がある。はたして市中病院は楽なのか？市中病院は少人数で診療を行わなくてはいけないため体力的につらいときもあるし、行き詰まることもあるし、入院患者も多い。知識・経験があれば楽に乗り越えられるのかもしれないが、私にはまだそれをすべてクリアする能力がない。どの科でもそうだが、市中病院、大学病院それぞれ大変である。

7年目の未熟者がつぶやいたが、歩みを止めずに日々の診療に励みたい。そしてこの原稿を書いている内にカンファレンスの予定が舞い込んだ。これも経験なのだろう。